



6月になりました。サクタロウとの散歩道に鮮やかな紫陽花が咲き始め、梅雨の季節を彩っています。この季節は肌トラブルが大変多くなります。あせも、虫刺されなど、兄弟の処方の追加はお気軽に伝えください。医療脱毛は早いもので5周年キャンペーン中！！驚きのプレゼントを大奮発します！院長 池澤滋

感染症情報 4/21~5/18	前回	今回
アデノウィルス	5	3
溶連菌感染症	22	16
感染性胃腸炎	49	60
水痘（水ぼうそう）	5	2
手足口病	0	0
RS ウィルス	5	0
突発性発疹	3	8
おたふく風邪	0	4
ヘルパンギーナ	0	0
ヒトメタニューモ	15	0
新型コロナ	2	2
インフルエンザA	0	0
インフルエンザB	2	1



私にばれないようにネットで取り寄せたトミカ：
保育士さんが全力で院長をかばう瞬間はぜひ
インスタグラムでご覧ください。

4コマまんが
作・絵
ちえこ&きみこ



★クリニック予約
★クリニックホームページ
★いけざわ beauty (インスタ)
★クリニック Instagram
こちらから→ → →



赤ちゃんの最初の言葉 ～泣き声が教えてくれること～

診察のあと、鼻水が詰まって苦しそうな男の子の鼻吸引を終え、私は『よかったね、スッキリしたね～！』と声をかけました。するとお母さんがほっとした表情で、こうおっしゃいます。

『家でも鼻が詰まって、夜になると本当に苦しそうなんです。家の鼻吸いではこんなに引けません。どうしたらいいですか？』

実はこの質問、よくいただきます。鼻が詰まる、苦しい、寝つけない……お子さんがつらそうな姿を見るとどうにかしてあげたくなるのが親心ですよね。



そんな時、私はこんなお話をします。

『赤ちゃんは苦しかったら、泣きます。泣くとお母さんが抱き上げてくれる。そして涙で鼻も多少流れる。それがいいんですよ！泣くことが、お母さんとのキャッチボールなんです。』

鼻が詰まって泣く。それは「苦しいよ」「助けてほしいよ」という、体いっぱいのサインです。

だからこそ、親はそれを受け取って「どうしたの？」と寄り添うことができる。

これこそが、親子の“キャッチボール”。

そのやり取りの中で、信頼関係が育ち、「感じて伝える力」「寄り添う力」が育っていくのです。

私はこの話を、18世紀フランスの思想家ジャンニジャック・ルソーの言葉と重ねて思い出します。ルソーは教育について、こう言いました。



「子どもに教えるな。彼が気づくのを助けよ。」現代風に言えば、「教えること」よりも、「気づく機会を大切にしよう」ということ。先回りしてなんでも取り除いてしまうより、子どもが不快さや困難を通して何かを感じ、その経験から学ぶことの方が、ずっと深く心に残るという考え方です。

鼻が詰まって泣く——それは、子どもが「不快」を通して世界を知っている瞬間。そしてその泣き声を受け止める親の姿も、子どもにとって「安心」の記憶になります。

しかし私も子育て真っ最中はこの「泣く」ということを全肯定できていませんでした。マンションに住んでいて、ご近所のことを考えたり、公共の場で泣くと迷惑と捉えてしまったり。こんな年になってそうだったと、今やっと気が付いているのです。

苦痛の全てを“先に”取り除かなくても大丈夫。赤ちゃんの「泣き」は「初めての言葉！」。

昔から「赤ちゃんは泣くのが仕事」とはよく言ったもんです。泣くこと、訴えること、それを受け止めること——それ自体が、育ちのプロセスなんだということを、どうか忘れないでいてください。もちろん、お家で鼻吸引ができない時や、あまりにもつらそうな時には、遠慮なくご相談ください。

(中耳炎や RS ウィルス感染症は鼻吸引が早期回復への近道です！)



文責 池澤千恵子